



④ヘリが墜落し、黒い煙をたてながら炎上している様子  
 ⑤米軍は、事故発生直後から約1週間にもわたって民間地域である事故現場を封鎖し、その一帯も管理下におきました。(沖縄国際大学2004.8.13)



辺野古の基地建設は、1996年のSACO（沖縄に関する特別行動委員会）最終報告の中で、沖縄県宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工であるボーリング調査が進められようとしており、座り込みの闘いにより阻止し続けています。

### 米軍ヘリ沖国大墜落 —“不幸中の幸い”ではすまされない！

8月13日（金）午後2時20分頃、沖縄県宜野湾市の沖縄国際大学の敷地内に、普天間基地所属のCH53D大型ヘリコプター1機が墜落し、爆発炎上しました。この事故で、米兵1名が重傷、2名が軽傷、民間人に負傷者はありませんでした。しかし、機体の部品が広範囲にわたって落下するなど、民間人に死傷者が出なかったのが不思議なぐらいで、再三指摘され続けてきた基地の危険性を改めて露呈する極めて許しがたい事故です。あろうことか、事故後、事故現場は米軍によって完全に封鎖され、その周辺も米軍の管理下におかれました。米軍は、沖縄県警側の合同現場検証要請も拒否し、県警が現場検証を許されたのは、事故発生4日後、しかも機体には一切触れられないという異例のものでした。また、米軍は、8月22日（事故後9日目）には、一方的な事故の調査結果をもって事故機と同型の大型輸送ヘリ6機の飛行を再開、イラクの作戦参加のため、普天間基地から相次いで離陸させました。

これほど横暴で、住民のことを見下し、命を無視しきった米軍の振る舞いが許されているのでしょうか。今、沖縄では民衆たちが怒りに燃え、普天間基地の早期返還、さらに辺野古移設反対を掲げて立ち上がっています。この声を沖縄だけに上げさせるのではなく、私たちは、激しい怒りをもって今回の事故に抗議するとともに、普天間基地の即時返還を求め、さらには、この危険な基地を辺野古にもつてくることを絶対に阻止しなければなりません。(松本)



⑥座り込みの様子  
 辺野古の座り込みは130日を超えました。東京の国会前においても座り込みの闘いは続いています。



辺野古の海は「自然環境の厳正な保護を図る区域ランク1」に指定され、天然記念物のジュゴンが住んでいます。ジュゴンだけではなく貴重な海藻、サンゴ、海ガメ、魚介類などが多く生息しています。

